

BU の精神

大隅基礎科学創成財団・酵母コンソーシアムフェロー
高知工科大学環境理工学群生命科学専攻・教授
石井浩二郎

遡ること約半年、私は幸運にも大隅基礎科学創成財団の第1期酵母コンソーシアムフェローに採択された。何かとお金の入用なこのタイミングに研究助成の手を差し伸べていただけたことを本当にありがたく思っている。まずは改めて財団に心よりの感謝を表したい。

私はこの春に高知工科大学環境理工学群に着任した。新しい環境に馴染むにはどうしてもお金と時間が必要になってしまう。今も毎日が新鮮なチャレンジに感じている。

高知工科大学は香美市という高知県東部の人口3万弱の自治体に位置する公立大学である。周りには豊かな自然とのどかな田園風景が広がり、私の毎朝の通勤経路は河川敷とその脇の見事な田畑のあぜ道になっている。

私は元々田舎の生まれで、中学・高校時代の通学路も田んぼのあぜ道であった。しかし、年輪を重ねてきたためか、あるいは今見ているテレビドラマの影響か、当時は目にもとまらなかつた道すがらの農作業が今はとても身近に感じられる。より正確には、私がそのような農業従事者になったことを想像してしまう——気まぐれな天候とはどう付き合っていくだろう、台風が襲来している間は何を感じるだろう、どんな確信が大切なニラや生姜の収穫日を決断させるのだろうか、失敗への不安は如何ほどだろうか、… ——。そして、その想像にさらに現実の自分を投射し、これまで私が染色体の実験研究で培ってきた技量や経験、知識などが自分の農業をどこかで助ける可能性を探ってしまう。そして、気づく。短絡的には今の自分の研究はどこにも役に立ちそうにないことを。

この思索はこれまで通勤途中に繰り返し何度も浮かんできている。シンプルな思索で、何の失意も含まれはしない。でもこの乖離の認識は次に、では自分は農家の方々と相對する關係においていったい何者になるんだろう、という疑問を生む。最初は、芸能や芸術を司る立場やそれに近い役割を適当に当てはめて自分を納得させていた。しかし、基礎科学のもつ創造性は少し種類の異なるものであり、何かの違和感を拭い去れずにいた。そんな中、ごく最近になって、実はそれは武士なんじゃないか、と思うようになってきた。驕りに響くかもしれない。しかし、立場の上下を論じているつもりは全くない。武士といってもせいぜい田舎の野武士である。ただ、その精神性や、世界中の競合相手と渡り合う意識、あるいは教育にも深く携わる現在の日常的業務内容など、共通項は案外少なくないのではないかと思っている。何より私自身、一国一城の主になりたくて高知にやってきた、という想いは強い。

と、研究とは全く無関係な文章をここまでつらつらと書き進めてきたが、実はこの内容と構成にはちょっとした伏線がある。今回、酵母コンソーシアムフェローとして財団から執筆依頼を頂戴したのだが、それは特に“助成選考時の応募書類の『基礎研究に対する姿勢や考え方』の自由記入欄に各フェローが書いていた内容が秀逸だったので、それに準ずるエッセイをお願いします”というものであった。しかし、私とその欄に書き連ねていた内容はというと、端的に言うところの恨み節、それまでの研究予算申請やポジション探しに対する恨み節そのものであった。かなりの分厚いオブラートを持ち込んだとしてもなかなかエッセイにまとめられるようなシロモノではない。どうしたものかと悩んでいた。

そこに一筋の光明が、自分の趣味からもたらされた。私はアメリカンフットボール好きでテレビ観戦を趣味としている。今シーズンは新しい若手が台頭して面白いシーズンになっているが、その話題の一つに古豪シカゴ・ベアーズの復活がある。今シーズンから新ヘッドコーチに39歳だったマット・ナギーが抜擢され、ベアーズはこれまで見事な活躍を見せている。そのナギーがチームの人心掌握に使ったモットーが悩んでいる私にもヒットした。

“Be You.”

ナギーはシーズン前にこの言葉をミーティングルームの壁に大きく書き出し、全てのプレイヤーに対して無理のないナチュラルな自分の個性・人間性を表現することを強く奨励したという。これである。この言葉こそ、まさに私が財団の助成応募書類の中で記述した、研究の応用面を説明する偽りの自分を登場させることなく本応募書類は素直に完成できたという例外性や、ポジション探しでは偽りの自分は通用しなかったという経験談のエグみを全て昇華させる、美しい表現である。Be Youの姿勢、Be Youのプライドこそが、大隅基礎科学創成財団の中に私が見出した精神とメッセージであった。そしてそれは高知の大地に今私が自分の足で立つ支えにもなっている。そのことにとっても感謝している。

ただ、Be Youの精神の説明だけではエッセイはまとめきれないことも予感していた。しかし、Be Youの表記をBUに変えてみた瞬間、私の中で全てがシンクロした。BU(=武)の精神である。農家の方に対する関係性も然り、自分の研究が短絡的に役立つか否かも然り、自己を律して道を求める姿勢も然り、戦いの感覚とプライドも然り、全ては日本特有の武士の精神に他ならないのではないだろうか。

個人によって物事の捉え方は千差万別であろう。しかし、私は基礎科学研究者として、このBUの精神をこれからも大切にしていきたいと考えている。